

氏 名	牧嶋 平
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 133 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	家を壊す、《よみ人知らず》の私として、{そして、それでも} 猶、《よみ人》である、私は、《わたくし（≠わたくしたち）》、を
審 査 委 員	主査 教 授 高橋 悟
	教 授 佐藤 知久
	教 授 加須屋 明子
	教 授 小山田 徹
	よしだ ぎょうこ（金沢美術工芸大学 教授）

論 文 の 要 旨

作者は 2020 年春のコロナ禍に長野県下伊那郡下條村に所在する築 120 年以上の父親の実家を想起し、2021 年 12 月から 2022 年 10 月にかけて、その家の解体に向き合いながら日々の記録を《解体日誌》に書き残しました。家の解体は美術の作品制作の枠組みにおいて作者自身によって始められましたが、作者はその過程で生じた葛藤により解体を中断し、家は最終的に解体業者によって壊されました。本論文は膨大な日誌記録の通読の助けとする《手紙》を第一部とし、《解体日誌》を第二部とする二部構成からなる論文です。

作者は《手紙》を《解体日誌》の共有のための擬似的な手紙としながらも、それらは長野県飯田市に所在するアートハウスで作者が出会った幾人かの人びとに実際に宛てられ、作品（本論文とは別の書籍）にのみ収録される《対話》を行うために執筆されました。作者は論文の著者として読者に語りかける自身を、そして論文の読者としてその著者から語りかけられる他者を、そしてその二者の関わりを、手紙という親密さと隔たりの調和したより対等な構造の中に置きました。

作者によるひとつひとつの《手紙》は《解体日誌》の内容を補いながら、その背景を丁寧に述べ、論理的かつ感性的に作者の取り組みを検証しています。それらの論述は作者の記憶や感情に照らして進められる必要から、作者は繰り返し自身の出生からの来歴に触れ、これまでの作品制作の経緯に、そして家や家族の歴史にまで言及しながら論を進めます。そして作者は自身の取り組みの本質を言葉で明らかにしていきながら、いくつもの問いかけを手紙の読者に、また本論文の読者に向けてなげかけます。その論述の展開において最も重要となるのは、作者の当初計画した作品制作が未完に終わり、作者はそれを意識的に《失敗》と捉えたことです。作者はこの意図的な認識を通して、《手紙》に述べられるような作者の問いの本質へと思考を深めていきました。

第一部の《手紙》はすべてで15通の手紙からなります。1通目から3通目では《居場所》をめぐる作者の根本的な《問い》の共有と、《手紙》という方法を選んだ意図の説明が行われます。4通目の《手紙》では2020年春から2021年冬までの家の解体に至る経緯が、《家を壊していいのか》という作者自身の最初期の問題意識と共に語られます。5通目の《手紙》は2020年春のコロナ禍のある日の日誌記事を転載したもので、家の解体には直接は関わらないものの、作者の心象の理解を助けるものとして共有がなされます。6通目から8通目の《手紙》では作者が問題とする《イエ》、ものの《存在》、家や家族との《わだかまり》について、1986年の出生からの作者の来歴に沿って述べられます。そこでは下條村の家に暮らしたことのない作者にどのようにして《イエ》の原理が意識され、内面化されていったかが語られます。9通目の《手紙》では《イエ》への作者の私観を、明治中頃に興された作者の父親の実家に生まれた幾人かの人びとの生に見られるある構図に則って説明をします。10通目の《手紙》では、作品制作によってものを新たに《存在》させることへの抵抗感について、作者自身の家庭環境に触れながら述べていきます。11通目の《手紙》は本来的に虚構の産物である美術作品とその制作行為への作者の違和感について、そして作者は自身の問題解決の《道具》として美術という枠組みを利用していたことについて述べていきます。12通目の《手紙》では、作者が自らの取り組みを《失敗》と意識的に捉えた背景を考察し、その《失敗》の検証を通して作者が作品の完成の先に求めた問題の解決に至りつつあることを確認します。そして作者は自身の問題解決において美術は無効であったことを《美術の敗北》と断定します。13通目の《手紙》では、作者は家に残された荷物整理のために壊される家で生活を共にした父親の姿について言及します。作者は父親の行為や思考が自身の理解の及ばないものとして苛立ちを覚えますが、その父親はあくまでも《他者》であるとして、その不可解さの受容に努めようとしています。14通目の《手紙》で作者はコロナ禍の頃のように再び京都駅八条口デッキのベンチを訪れ、その頃と比べて自身になにか変化があったのかと思いを巡らせます。そして作者には家や家族や土地がこれまでよりも少し離れたものとして感じられ、近い将来に開かれるかもしれない《これから》の存在を感じます。15通目の《手紙》で作者は手紙のやりとりをいったん終わりとし、これまでその擬似的な《手紙》を送り続けてきたアートハウスの人たちとの《対話》の約束をして手紙を結びます。

作者はこの《手紙》の執筆により、第二部の《解体日誌》の記述を参照しながら、また自身や家の来歴に触れながら、家、土地、家族、美術、そして生きていくことのありようを言葉で見つめなおしました。作者は《手紙》の冒頭で述べたように、作家であることを辞退しようとしています。また作品と本論文のタイトルが示す《よみ人知らず》(匿名の、あるいは不明の作り手)であることと、まぎれもない《よみ人》であることの両義性の中に、作者自身の《居場所》を見出そうともしています。そしてその先に新しい《生活》が結ばれることを作者はまだ少し期待をしています。

作者は作品(《対話》も収録した書籍)に作者の創作の本質を置きながらも、作者が実際に《手紙》を送り続けたアートハウスで出会った人たちとの間に《問い》の共有と《かかわり》の構築を試み、その終わりに《対話》を行いました。作者は本論文の読者にも、《手紙》を頼りとして《解体日誌》を読み進め、そして《問い》や《かかわり》が結ばれることを期待して本論文を整えました。

審査結果の要旨

牧嶋平の発表は論文の演劇的朗読によるプレゼンテーション、図書館の書棚に紛れ込ませた書籍の作品展示、さらにオプションとしての自宅のアパートの鍵を受け取り鑑賞する予約制の体験型展示から構成された。

作品タイトルの「家を壊す」とは、牧嶋の父の実家となる長野県下條村での農家の「家屋の解体とその記録」を指す。下條村はかつて氏の一族が長年暮らしてきた場所で、一族の墓地も守られている。また近隣には知り合いが今も住まわれている。解体業者に委託するのではなく、牧嶋自身が手作業で解体すること。この過程から牧嶋は「如何にして丁寧に終わるのか？」というコンセプトを掴みだした。そして実家を解体するという、現在多かれ少なかれ多くの人々が直面する問題と取り組むにあたって様々な思いや葛藤の日々、ある規則性に沿って実現しようとしては、父や自身と対峙してそこで逡巡する、といった心の動きと行動について、日記の形で詳細に書き綴り、膨大な量のテキストの集積が築かれていった。同時に古民家を簡単に取り壊すのとも、レノベーションするのとも異なる「如何にして丁寧に終わるのか？」という設問は、改めて、美術における「つくること」の根拠や「家族」という紐帯についての正当な理由を問い直すことを牧嶋自身に迫ることにもなった。自己の基盤を揺るがすような深い内省を迫るこのような状況に対して、安易な解を求めることなく牧嶋は常に真摯に応答しようと試みてきたといえる。

この状況から牧嶋が考案した手法が、集積された膨大な日誌をあたかも「詠み人しらずの他者」の日誌を読み解くような手法で、記述しなめたメタテキストという方法で、一種の自己解離による救済ともなっている。牧嶋にとって、自身の日記というものを客観視する形でのメタテキスト執筆に取り組み、行為を相対化することは、他者に向けての発信と、自身の振り返りとが両立し得る手法となっている。博士論文は、個人の経験と逡巡を「よみ人知らず」という文章表現として他者との共有を試みるという非常に新しい試みであり、家の解体と家族の解体と再生の試みが重なり、本人の言葉で言う「失敗」の経験が、入子状の構造として日記という形で提示されていた。

牧嶋の研究は「私」を何らかの達成感へと駆り立てる根源的動機に関する、深い自己省察の形をとっている。それは、美術作品を制作するプロセスについての、作ることによって何かを達成することの社会的意義についての、また自身とそのルーツに向き合うための省察である。そのため借物の概念を排し、あくまで具体的かつ主観的に、当事者として自らの経験を記録した集積された

「日誌」、そしてその日誌を作者が分析的に読み返し、その内容を他者に向けて語る「手紙」という二つの部分から、論文を構成している。「学術論文は客観性を保持すべきである」と考えるなら、この「論文」は論文であることから大きく逸脱している。

今回の展示は美術なのかどうか戸惑うほどの様々なボーダーが見受けられ、提示された製本を作品として受け取るなら、新しい時代の表現へのアプローチを感じるものであった。作品と制度との中間領域にあえて留まるという困難かつ繊細な領域を開拓したともいえる。しかしながら、展示としての図書館での提示と自宅での提示は、他者との共有（読まれるという関係）において、「よみ人知らず」の日記がどの様に他者との関係の中に入るのか、もしくは入らなくとも成立するのかなど、他者や社会との関係性についての牧嶋の立ち位置が捉えにくい側面があった。

ただし、近年社会科学の研究手法として注目されてもいる「オートエスノグラフィー（autoethnography）」つまり「研究者自身の主観的な経験を、ある集団や問題についての研究を行うために用いる手法」の実践成果として見るなら、今回の展示と論文は優れているといえる。当事者としての日常生活、感情、逡巡、失敗についての同時進行的な主観的記述を通じて、美術作品の制作過程を記録するだけでなく、その経験を少し時間的距離を置いたところから分析し熟慮し、かつその結果を、読者や未来の他者とのあいだに広がる相互主観的な次元において再提示する、という方法によって構成されており、その方法論的洗練によって、制作をめぐるテキストとして、個人的な思考を記述した単なる主観的内省にとどまらない、「つくること」の新しい概念化を野心的に試みることに一定程度成功している。つまり「よみ人知らず」の「私」として何かをつくる、という認識に至っているといえる。

「イエ」制度がほぼ崩壊した現代の私たちにとって、自らのアイデンティティの基盤はどこにあるのか。この問いはまだ誰によっても十分には答えられていないが、本論はその問いの答えに近づく方向性、つまり、イエのためでも美術というシステムのためでもなく、景色や山河への「返礼」として何かをつくるという、少なからぬ人々、名も知らぬ多くの人々がこれまでも行なってきた営為に自らも連なっていく。地域に結びついた、あるいは具体的な人間と人間のあいだの、「ローカル」な営為に参加する人々として自分はある—そういった方向性を示していると言える。

日本語で書かれた美術に関するオートエスノグラフィックな試みとして、さらに「イエ」と「個人」の関係をめぐる実践的な生活記録および考察として、今回の牧嶋の発表は一定の評価を受けるべき優れた水準に達している。